

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第5号

《研究ノート》

平底円筒形押型文土器に関する一考察
今村 結記

縄文時代の安山岩製スクレイパーについて
桑波田 武志

鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介
黒川 忠広

古代から中世における遺構の方向
―農業開発総合センター遺跡群を事例として―
東 和幸

鹿児島県内の平安時代の土器供膳具の様相
―川内平野の資料を中心に―
岩元 康成

赤色顔料の原料採取地を求めて
―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から―
内山 伸明・橋本英樹ほか

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ）
永濱功治・内山伸明・中村幸一郎

鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題
―埋蔵文化財センターの取り組みを中心に―
馬籠 亮道

埋蔵文化財を活用した授業の展開
國師 洋之

《資料紹介》
堅野冷水窯跡出土遺物の追加報告
―物原Ⅰを中心に―
関 明恵

西ノ平遺跡出土墨書土器
長崎 慎太郎

荘上遺跡出土資料
―その1―
森 幸一郎

科学分析報告一覧
南の縄文調査室

放射性炭素年代測定集成
内山伸明・園田ひとみ・長野眞一

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2012. 3

縄文の森から 第5号

平底円筒形押型文土器に関する一考察 今村 結記	1
縄文時代の安山岩製スクレイパーについて 桑波田 武志	8
鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介 黒川 忠広	16
古代から中世における遺構の方向 ―農業開発総合センター遺跡群を事例として― 東 和幸	28
鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相 ―川内平野の資料を中心に― 岩元 康成	37
赤色顔料の原料採取地を求めて ―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から― 内山伸明・橋本英樹・古谷充章・團野瑛章・辻広美・高田潤	47
トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ） 永濱功治・内山伸明・中村幸一郎	55
鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題 ―埋蔵文化財センターの取り組みを中心として― 馬籠 亮道	59
埋蔵文化財を活用した授業の展開 國師洋之	69
〈資料紹介〉 豎野冷水窯跡出土遺物の追加報告 ―物原Ⅰを中心に― 関 明恵	75
〈資料紹介〉 西ノ平遺跡出土墨書土器 長崎 慎太郎	87
〈資料紹介〉 荘上遺跡出土資料 ―その1― 森 幸一郎	95
科学分析報告一覧 南の縄文調査室	99
放射性炭素年代測定集成 内山伸明・園田ひとみ・長野眞一	106

〈資料紹介〉 豎野冷水窯跡出土遺物の追加報告

—物原 I を中心に—

関 明恵

Additional Document of Tateno-Hiyamizu Kama-Ato'(Tateno-Hiyamizu Kiln Ruins)
of a Exhumation Remains -Led by monohara I -

Seki Akie

1 はじめに

豎野冷水窯跡は、江戸時代の薩摩焼古窯の一つである。藩窯として開窯され、藩主やその一族などの上級武士層が使用する茶道具や日用品を製作し、一般的に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の陶器を多く焼いた窯として知られる。その窯の位置は、JR鹿児島駅の北西約1kmの鹿児島市冷水町346番49号（第1図参照）に所在した。市街地を取り囲むシラス台地の小谷を形成している台地末端部分の南側斜面にあり、標高は胴木間で約25m、窯尻で約30mを測る¹⁾。1978年、南風病院女子寮建設に伴い発掘調査が行われ、窯跡1基と物原2か所（Ⅰ・Ⅱ、第2図、第3図参照）が検出され、物原からは大量の陶器片や窯道具が出土した。

近年、薩摩焼窯跡の発掘調査が増加し、その成果は全国的な近世陶磁器の研究を取り入れることにより、飛躍的に考古学的な情報が蓄えられている。豎野冷水窯は、薩摩焼諸窯に強い影響を与えた藩窯であり、薩摩焼の研究上、重要な価値を有する。また薩摩焼の窯跡としてもいち早く発掘調査が行われ、その成果はそれまで美術史上で語ることの多かった薩摩焼を、考古学上の基礎資料として捉える契機となった遺跡でもある。

しかしながら、膨大な出土遺物が諸制約により十分整理報告されていないこと、窯跡周辺がすでに市街地化されており、1978年当時ほどの大規模な調査が今後期待できないことなど、24年前に整理報告が終了した資料とはいえ、今日的な視点で再整理を加えて報告する必要があると考え本報告を行うことにした。

2 出土遺物

1～5は白薩摩の碗である。1は腰が張る器形で、胎土は粒子感のある白色、高台はバチ状に削り出され、切り込みが4か所の割り高台をなす。高台内底は兜巾状を呈する。2は外面腰部に稜を有するものである。外面には呉須による文様が描かれる。高台は断面四角形に削り出される。見込みには胎土目が熔着している。3は外面に呉須による草文と思われる文様が描かれる。高台内底は兜巾状に削られる。4は器壁が薄く、口縁部がわずかに

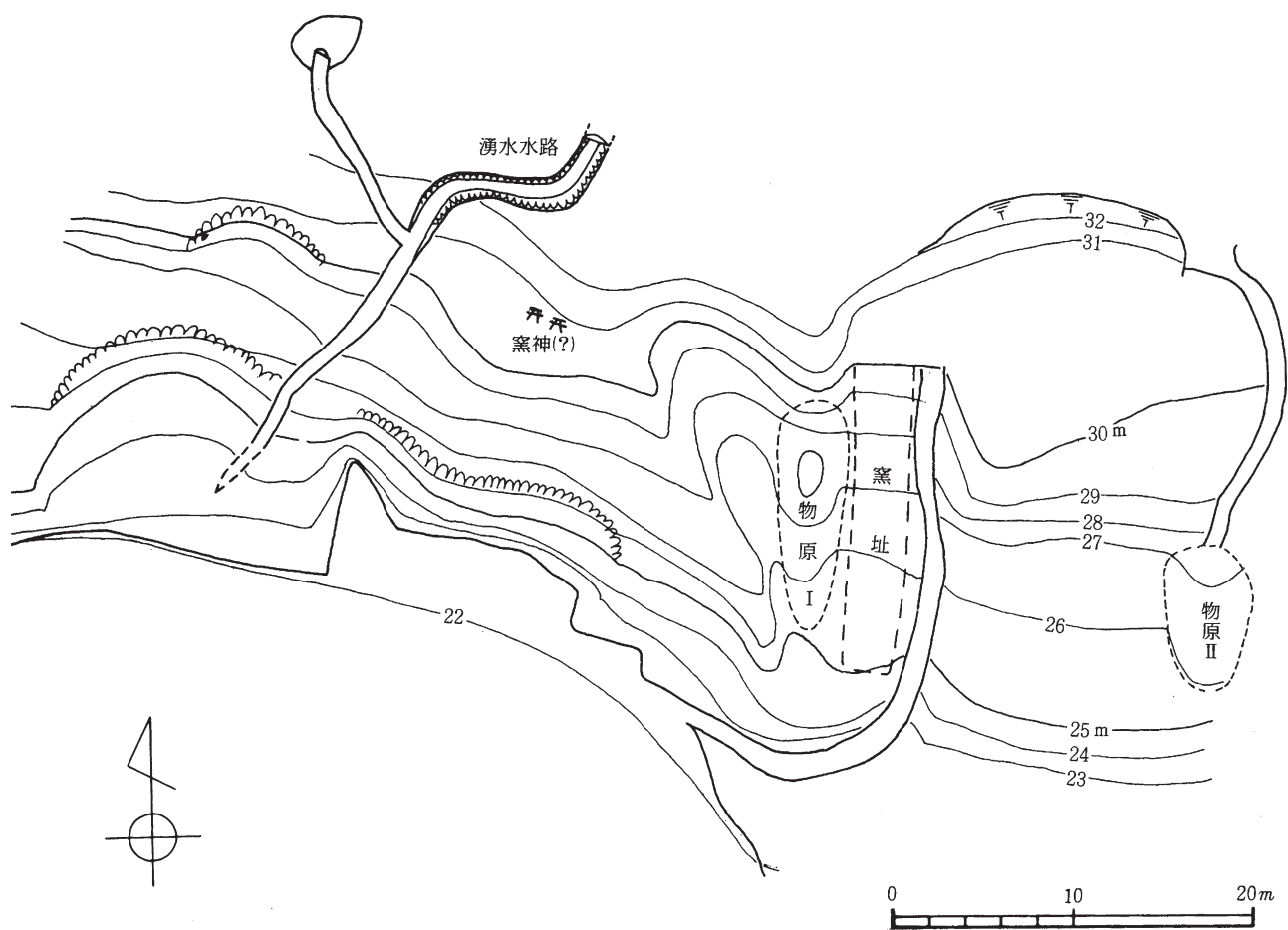
に外反する。焼成不良で透明釉が熔けきっていない。外面には呉須により花文が描かれる。5は外面全体に呉須による文様が描かれる。焼成不良のため透明釉が熔けきっておらず、呉須の発色も鈍い。

6～10は碗の熔着資料で、6～9は白薩摩、10は胎土が灰褐色を呈するものである。6は腰部に稜を有する碗2点が熔着したものである。胎土は磁器質で焼きしまっており、外面には褐色の降りものが熔着する。7は碗の底部2点が熔着したものである。上の製品の見込みと下の製品のと畳付には胎土目が熔着しており、さらに上下に碗が重ね焼きされていたものと考えられる。2点の外面には、景色と思われる鉄釉が観察される。8は平面が円形、断面が馬蹄形を呈するハマに、碗が熔着した資料である。9は呉須による文様が描かれた碗に、サヤ鉢の蓋のようなものが熔着した資料である。10は内面陰刻、外面陽刻による蓮葉文が施された碗の口縁部である。釉は緑褐色に発色する。内面には胎土目が熔着する。

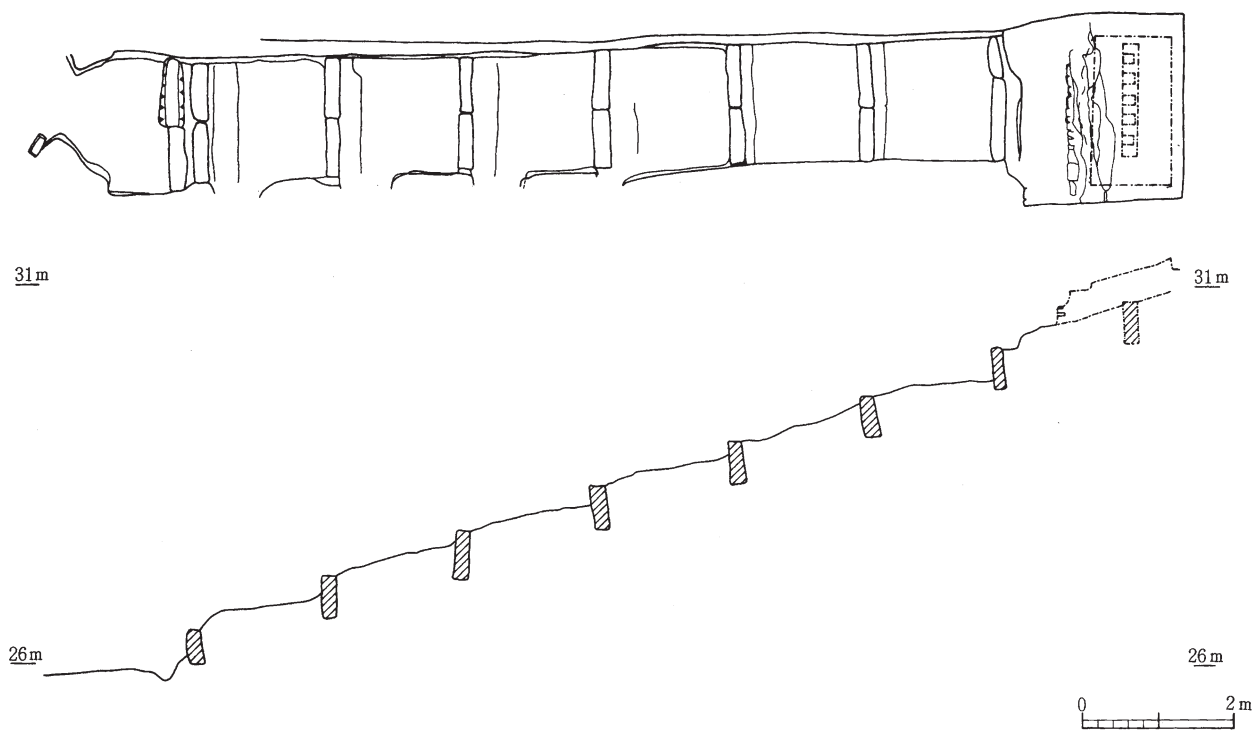
11～17は白薩摩の皿である。すべて型打ち成形により製作された資料である。11は見込みに葉脈が線刻された皿である。断面が三角形状を呈する高台には釉剥ぎされる。12は内面に陽刻による唐草文と思われる文様が観察される。13は菊花型に型打ちされたものである。焼成不



第1図 豎野冷水窯跡位置図



第2図 遺跡地形図



第3図 窯跡平面図

良のため釉が熔けきっていない。14は角形を呈するものと思われる器形で、残存する一角は高台がクランク状を呈する。文様は陽刻により、唐草文と思われる文様が施される。15は平面が楕円形の形状を呈し、口縁部は輪花をなす。16は正八角皿である。口縁部は外側に折れ、端部はさらに上方へ短く折れ曲がる。17は六角皿である。口縁部は16と同様の形状を呈する。

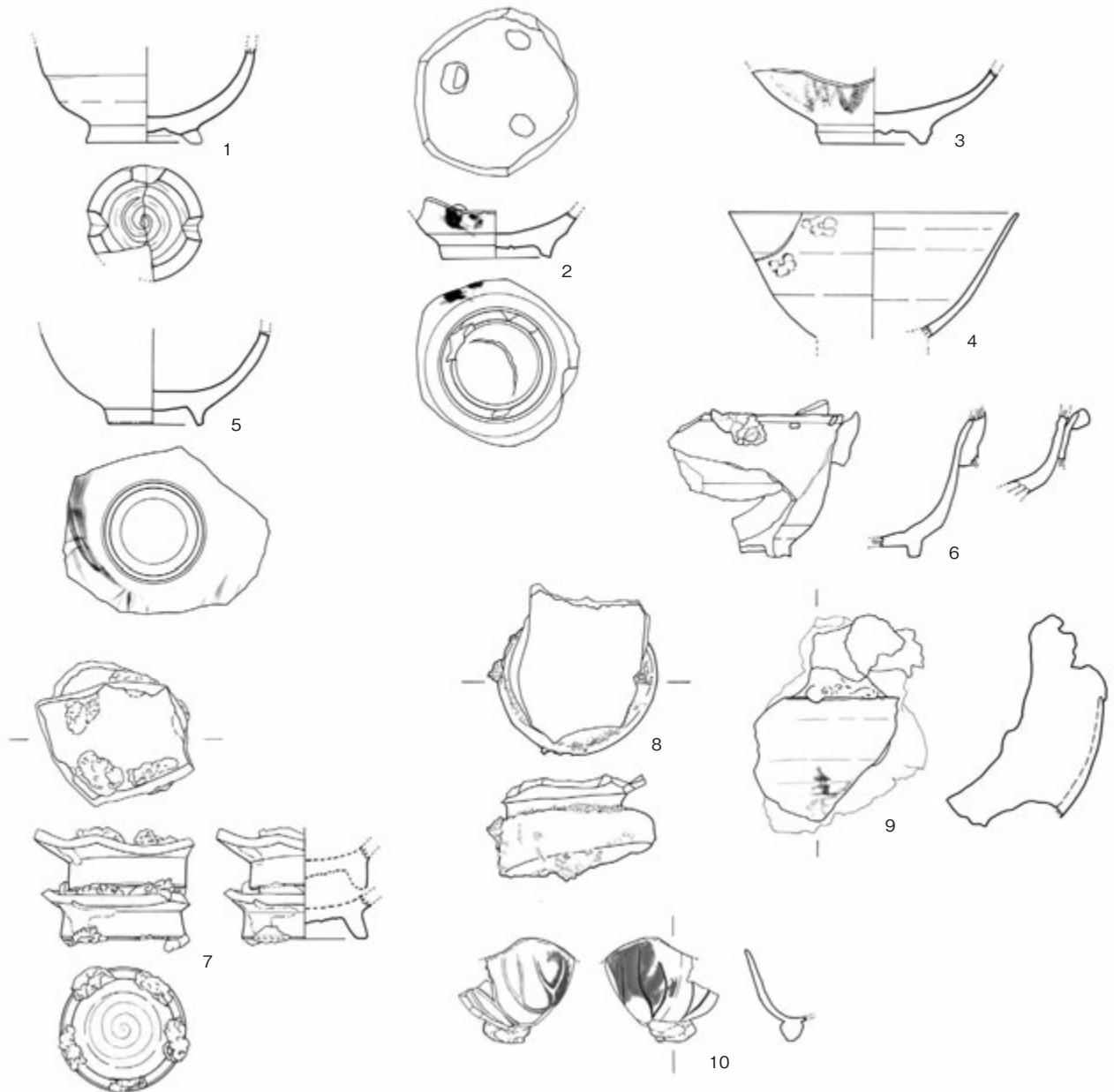
18は胎土が灰褐色を呈する皿である。釉は灰褐色で外面腰部から畳付内底は露胎する。見込みは重ね焼きをした際他製品の一部や砂粒が熔着する。

19・20は、詳細な器種は不明であるが、ここでは鉢として分類した。どちらも型打ち成形でつくられる。19は白薩摩で、全体的なプロポーションが、隅丸方形を呈

するものと思われる。隅丸部分には逆ハート型の透かし彫りが施され、辺にあたる部分には2段の挟りが入る。焼成不良のため釉が熔けきっていない。20は灰白色を呈する胎土に、緑褐色の釉がかかる。口縁部は輪花をなし、口縁下位に長方形の透かし彫りが施される。

21は蓮華である。灰黄褐色の胎土にやや緑がかった灰色の釉がかかる。内面には灰被りの痕跡が残る。

22～26は茶入である。胎土は精緻で灰褐色を呈する。22は肩衝で、肩部がシャープにつくられる。体部は細身で、内外面にはヘラ状工具による横縞が入る。釉は外面腰部までと内面上位にかかり、浅黄色に発色している。23は肩衝の資料であるが、22と比べ肩部がややまるみを帯びる。体部は細身で、中央部はわずかにくびれる。釉



第4図 物原Ⅰ内出土遺物(1)

は黒釉が外面腰部まで、内面は灰色に発色して上位までかかる。24も肩衝の資料であるが、体部中央で膨らむ形状を呈する。外面中位以下はヘラ状工具により横縞を強く残す。釉は内外面ともに残存部にはかかり、外面は浅黄色、内面は透明に発色する。25は糸切りにて底部を切り離した後、腰部を面取りしたものである。にぶい黄褐色の釉が外面腰部までかかり、内面は残存部については露胎である。26は腰部が膨らむ形状のもので、茄子形や尻彫形、瓢箪形が考えられる。釉は黒釉が外面腰部までかかり、内面は中位まで灰緑色に発色してかかる。外底面には円形ハマの一部が熔着する。

27・28は白薩摩の蓋である。27は土瓶蓋の形状と類似するが、中央部にはつまみが付かず、円形の孔を有する。上面には呉須により文様が描かれ、縁取りは鉄釉が使用されているのか褐色に発色する。28は白薩摩の壺蓋である。身受け部（口唇部）の釉は剥ぎ取られる。

29は土瓶である。白色の微細な砂粒を含む暗灰褐色の胎土に、やや赤みを帯びた褐色の鉄釉が残存部全面にかかる。特徴として注口下位に焼成前に入れられた「×」印のヘラ描き観察される。

30は内面が露胎する白薩摩の袋物で、詳細な器種は不明であるが、外面腰部には、呉須により草文が描かれる。31は香炉と思われる。香炉は一般的に内面は露胎するが、この資料は3足の畳付以外は総釉である。型打ち成形によりつくられ、外面腰部と脚部には繊細な文様が施される。32は暗灰褐色の胎土に、褐釉がかかる香炉である。釉は内面口縁部下位から外面脚部までかかり、内面と外底面は露胎する。欠損しているが、土瓶と同様の脚が3足つくものと思われる。

33は白色の微細な砂粒を含む淡灰褐色の胎土に、やや灰色に濁った釉がかかるもので、詳細な器種は不明である。落とし蓋が被るものと考えられる。蓋受け部（口唇部）から内面は露胎し、蓋受け部には砂を多く含む胎土目が熔着する。34も用途不明の資料であるが、蓋が被る器種であろう。胎土は灰白色で、外面黒色、内面緑褐色に発色した釉が残存部すべてにかかる。

35は仏花瓶と考えられる白薩摩の底部である。上部が欠損しているため全容は不明であるが、呉須により「・・衛門」、「右衛門」と判読できる3名の人名が記され、注文製作による供献品と考えられる。

36は白薩摩の小壺で、頸部の残存が悪く、胴部中央がくびれる。37の詳細な器形は不明であるが、白薩摩の壺とした。胴部は欠損しており、肩部で鋭角に屈曲する。口縁端部と、その下位には低い突帯を有する。

38は、微細な白色砂粒を含むにぶい灰褐色の胎土に、淡黄色の釉が残存部すべてにかかる甕である。

39は肩が張る形状を呈する徳利である。38の甕と同様の胎土と釉薬であるが、一部釉は黒色に発色する部分も

みられる。タタキ成形でつくられており、内面はナデ調整が行われており、タタキ成形時のあて具痕が残る。

40は漏斗としたが、他の器種である可能性も考えられる。黒褐色の胎土に、内面のみ鉄釉がかかる。外面にはヘラ状工具による縦方向のナデ調整が施される。

41は用途不明の白薩摩である。ボタン状の形状をしたもので、表面は型打ち成形の獅子頭が、裏面には横方向に紐を通すためと思われる孔がつくられている。

3 考察

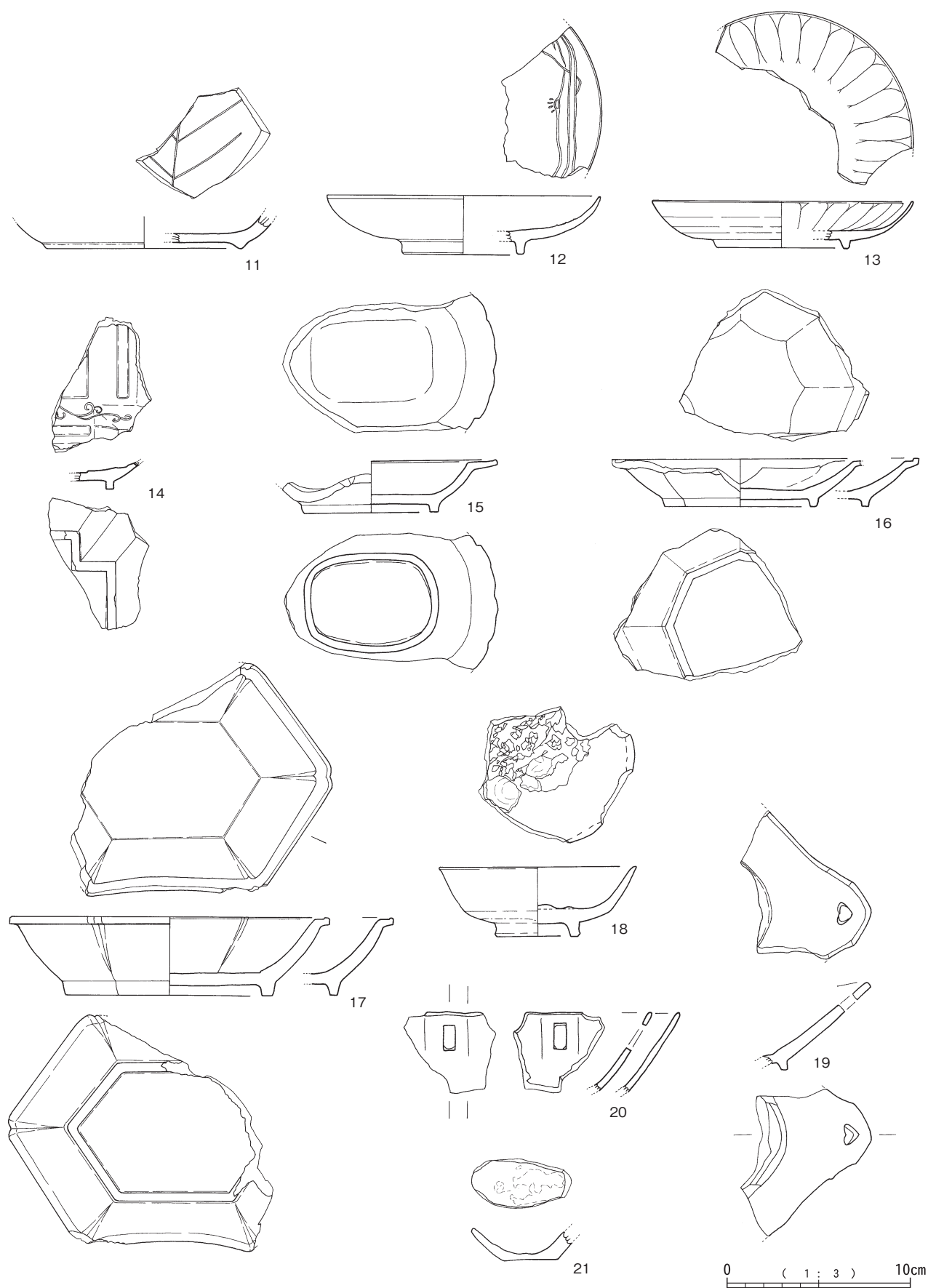
物原Ⅰ内出土の遺物について、新たな41点を追加資料として報告したが、ここから読み取れる若干の考察を試みたい。

物原Ⅰは窯体の西側に形成されており（第2図参照）、白薩摩の碗や皿、茶入等の茶道具、仏具、土瓶など多種多様な製品が出土している。また、ハマやサヤ鉢のような窯道具も多い。

白薩摩の碗については、厚手で胎土がばさつくものと薄手で胎土が磁器質のものとはみられるが、稲荷窯採集資料のように黒色粒子を含むもの（渡辺2004）は見られなかった。前者は高台も厚く、畳付の幅も広い。また、高台内底は兜巾状をなすものが多く、焼成時の重ね焼きのため、見込みや畳付に胎土目が熔着している。文様は、正面に鉄釉を流した景色を持つ碗があり、これと同様の碗が苗代川系窯場の堂平窯出土品に報告されている²⁾。そのほかにも、やや腰の張るプロボーションや高台内底を兜巾状につくこと、胎土目を使用した重ね焼きの手法など、苗代川系窯場に共通する点が多い。これは藩窯である堅野冷水窯から、藩内の地方窯への技術交流が行われたことと検証する要素と指摘できる。（渡辺2003、関2009）また、近年の報告では消費地である川骨遺跡（薩摩川内市）から同様の碗の資料が出土している³⁾。しかし、冷水窯のものか堂平窯のものか断定できない。

製品に描かれた文様や文字については、蓋（27）の文様の縁取が鉄釉と思われるだけで、他は全て呉須で描かれていた。また、文様は腰部に小さく3か所に略した草文状が描かれていたが、白薩摩によくみられる「千鳥印」はみられなかった。

碗のなかで特筆すべき資料としては、10が挙げられる。1点のみの資料であるが、東京国立博物館や鹿児島県歴史資料センター黎明館、始良市歴史民俗資料館蔵の白釉蓮葉茶碗に類似した碗である。胎土目が熔着した「窯傷」があるため流通品ではなく本窯の製品と考えられる。型打ち成形で蓮葉を表し、薄手の灰褐色を呈する精製した胎土である。伝製品は17世紀後半とされているが、今回の資料は胎土や釉調から、模倣品として作られた可能性が考えられよう。ただ、想定されていたとはいえ、堅野冷水窯で火計手として名高い白釉蓮葉茶碗が製作され



第5図 物原 I 内出土遺物 (2)

ていた資料であることは言える。

また、白薩摩の皿や鉢、香炉については、型打ち成形でつくられており、凝った器形のものや陽刻の繊細な文様が表現されたものがみられた。鉢には透かし彫りもほどこされ、当時としては非常に洗練された最先端のデザインであったであろう。

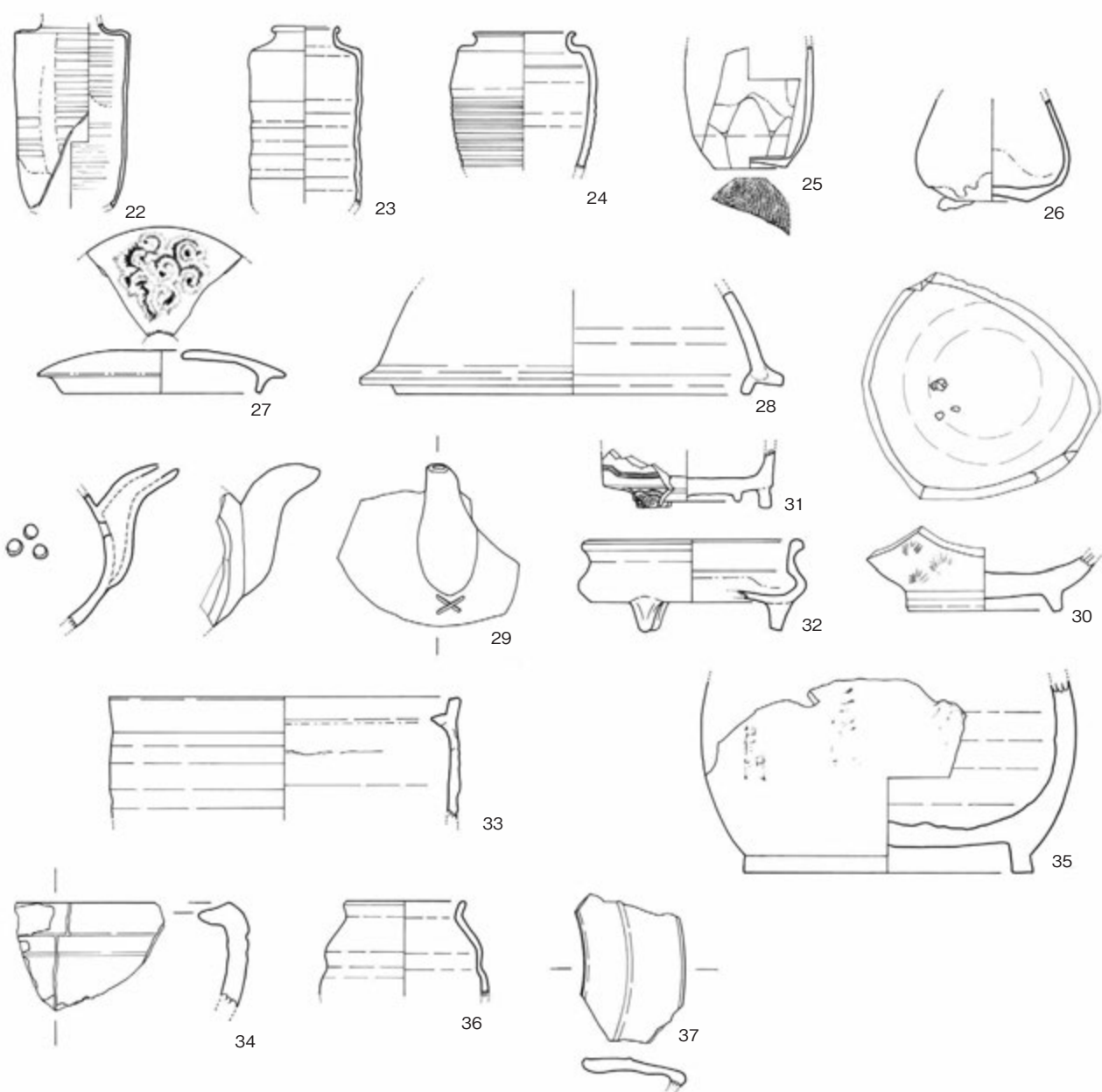
一方で、灰褐色の胎土に淡黄色に発色する透明釉をかけた皿や褐釉の香炉、日用品としての土瓶や徳利、甕、漏斗等の陶片も出土しており、これらが苗代川系大量日用品とどのように使い分けられているのか、注視することが重要であろう。

最後に豎野冷水窯跡から大量に出土している茶入につ

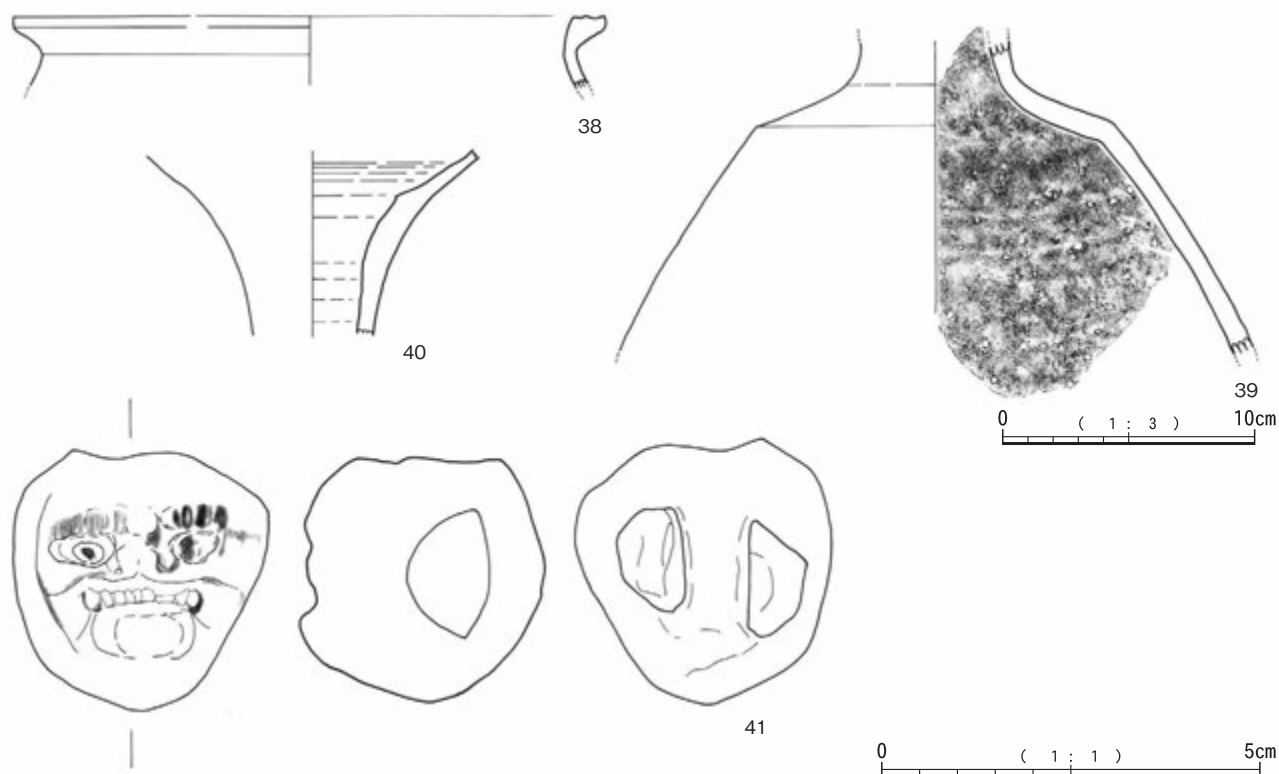
いて触れておきたい。正確にカウントしている訳ではないが、製品の出土品中に占める茶入の割合は概観的にみて極めて多い。器形としては肩衝形が多く、器壁は比較的薄く丁寧につくり、胴部に横縞状の沈線を多重に施したり（24）、腰部を面取りした（25）特徴のある器形がみられる。多様な器形を持つ茶入が多いという特徴は、この窯の稼働期や薩摩焼藩窯の性格を考える上で極めて重要である。

4 おわりに

昭和51年に実施された発掘調査では、1基の連房式登り窯と2か所の物原が検出されている。今回の追加報告



第6図 物原Ⅰ内出土遺物（3）



第7図 物原Ⅰ内出土遺物（4）

は未整理の「物原Ⅰ」と注記された出土品から抽出した遺物を報告した。物原Ⅰと登窯は近接して隣合う位置関係にあるが、物原Ⅱと登窯は12～14m離れた位置にある。物原ⅠとⅡがともに検出された登窯に帰属する遺構であるのか否か、または時間的な差が両者にあるのか、双方の遺物の特徴を比較できる内容の資料報告が必要であろう。今回の報告で甚だ不十分であるが、本報告が未だ解明されていない藩窯堅野冷水窯の再検討に繋がる機会となれば幸いである。

【註】

- 1) 社団法人鹿児島県共済会南風病院 1978『堅野（冷水）窯址』南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 2) 関明恵・繁昌正幸編 2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
第1分冊 p.134- No.16, p.135- No.19,23,24
第2分冊 p.212- No.16,20, p.320- No.92, p.303- No.6
- 3) 鶴田静彦・関明恵・福蘭美由紀編 2011『川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
p.105,106- No.190

【引用・参考文献】

- 渡辺芳郎 2003「近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流」『鹿児島大学法文学部紀要』第57号
- 関一之 2004「堅野（冷水）窯跡出土の茶入」『からから』No.18 鹿児島陶磁器研究会
- 渡辺芳郎 2004「堅野稲荷窯跡採集資料」『鹿大史学』第51号
- 関明恵・繁昌正幸編 2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 関明恵 2009「堂平窯製品の経年変化にうけて」『南九州縄文通信 20 南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集－』下巻



写真図版1 物原 I 内出土遺物 (1)



写真図版2 物原 I 内出土遺物 (2)



写真図版3 物原 I 内出土遺物 (3)



写真図版4 物原Ⅰ内出土遺物(4)



写真図版5 物原Ⅰ内出土遺物（5）

第1表 物原Ⅰ内出土遺物観察表

掲載 番号	出土地点	種別	器種	胎土の色調	釉調・釉葉	施釉	法量（cm）			備 考	
							口径	底径	器高		
1	物原Ⅰ	北西	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	4.8	—	割り高台 4か所
2	物原Ⅰ	北東	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	4.8	—	外面に呉須による文様。見込みと量付に胎土目
3	物原Ⅰ	北西	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	4.8	—	外面に呉須による文様
4	物原Ⅰ	北東	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.0	—	—	外面に呉須で花文
5	物原Ⅰ	北西	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	—	4.6	—	外面に呉須による文様
6	物原Ⅰ	北西	白薩摩	碗	灰白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	—	—	重ね焼き熔着資料。外面に胎土目熔着
7	—	—	白薩摩	碗	灰白	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	5.6	—	重ね焼き熔着資料。見込み及び量付に胎土目熔着
8	物原Ⅰ	南西	白薩摩	碗とハマ	碗：灰白色 ハマ：灰褐色	碗：透明釉	量付釉剥ぎ	—	—	—	碗とハマの熔着資料
9	物原Ⅰ	—	白薩摩	碗・窯壁？	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	—	—	—	外面に呉須による文様。熔着資料
10	物原Ⅰ	—	？	碗	暗灰黄色	緑褐色	残存部全面施釉	—	—	—	外面陽刻。内面印刻による蓮葉文外面に胎土目熔着
11	物原Ⅰ	北西	白薩摩	皿	灰白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	10.6	—	内面葉脈の線刻文
12	物原Ⅰ	—	白薩摩	皿	淡い黄白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	14.8	6.4	3.3	型打ち成形。内面陽刻文（唐草か？）
13	物原Ⅰ	—	白薩摩	皿	淡い黄白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	14.0	6.3	2.6	型打ち成形 菊花皿
14	—	—	白薩摩	皿	淡い黄白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	—	—	型打ち成形。内面唐草の陽刻文
15	物原Ⅰ	北西	白薩摩	皿	灰白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	口径長径 13.6	底部長径 7.3	3.0	型打ち成形 桜花皿
16	物原Ⅰ	南東	白薩摩	皿	灰白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	8.4	2.8	型打ち成形 六角皿
17	物原Ⅰ	—	白薩摩	皿	淡い黄白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	口径長径 17.4	底部長径 11.2	4.3	型打ち成形 八角皿
18	物原Ⅰ	北東	陶器	皿	灰褐色	灰褐色褐釉	外面腰部から高台内面露胎	10.6	4.4	3.8	見込みに他製品の一部や砂粒熔着
19	物原Ⅰ	南東	白薩摩	変形鉢	灰白色	透明釉	総釉 量付釉剥ぎ	—	—	—	型打ち成形。逆ハート形透かし穴
20	物原Ⅰ	TⅡ	白薩摩？	鉢？	灰白色	緑褐色	残存部全面施釉	—	—	—	型打ち成形 口縁部輪花。長方形の透かし彫り
21	—	—	陶器	蓮華	灰黄褐色	緑灰色	外底面露胎	—	—	—	
22	物原Ⅰ	—	陶器	茶入	灰褐色	浅黄色	内面上位から外面腰部まで施釉	—	—	—	外面に横線
23	物原Ⅰ	北西	陶器	茶入	灰褐色	外面：黒釉 内面：灰色	内面上位から外面腰部まで施釉	2.8	—	—	
24	物原Ⅰ	南東	陶器	茶入	灰褐色	褐釉 透明釉	残存部全面施釉	4.4	—	—	外面中位に数条の横線入る
25	物原Ⅰ	南西	陶器	茶入	灰褐色	鈍い黄褐色	外面腰部まで施釉	—	3.2	—	外底面糸切り後。腰部面取り
26	物原Ⅰ	北西	陶器	茶入	灰褐色	外面：黒釉 内面：灰緑色	内面中位から外面腰部まで施釉	—	3.2	—	外底面糸切り。円形ハマの一部熔着
27	物原Ⅰ	—	白薩摩	蓋	灰白色	透明釉	上面のみ施釉	4.8	底径 11.2	2.0	天井部中央部に穴。呉須による文様 鉄釉による縁取り？
28	物原Ⅰ	—	白薩摩	壺蓋	灰白色	透明釉	見受け部釉剥ぎ	16.0	底径 19.0	—	
29	物原Ⅰ	—	陶器	土瓶	暗灰褐色	赤みがかった 褐釉	残存部全面施釉	—	—	—	注口下位に「×」印（焼成前）
30	物原Ⅰ	北西	白薩摩	袋物	灰白色	透明釉	量付から高台内底釉剥ぎ	—	7.0	—	外面に呉須による草文
31	物原Ⅰ	南西	白薩摩	香炉	灰白色	透明釉	総釉 三足の量付釉剥ぎ	—	4.6	—	外面陽刻文
32	物原Ⅰ	南東	陶器	香炉	暗灰褐色	褐釉	内面口縁下位から外面脚部まで施釉	9.6	—	4.1	
33	物原Ⅰ	北西	陶器	不明	淡灰褐色	灰色	蓋受け部は釉剥ぎ。内面は露胎	16	—	—	口唇部に砂を多く含む胎土目
34	物原Ⅰ	北西	陶器	不明	灰白色	外面：黒釉 内面：緑灰色	残存部全面施釉	—	—	—	蓋が被る
35	物原Ⅰ	北東	白薩摩	鉢？	にぶい黄白色	透明釉	量付から高台内底釉剥ぎ	—	13.0	—	外面に呉須で人名
36	物原Ⅰ	—	白薩摩	小壺	白色	透明釉	残存部全面施釉	5.2	—	—	
37	物原Ⅰ	北西	白薩摩	壺？	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	—	—	—	
38	物原Ⅰ	北西	陶器	甕	にぶい灰褐色	淡黄色	残存部全面施釉	23.4	—	—	
39	物原Ⅰ	—	陶器	徳利	にぶい灰褐色	淡黄色	残存部全面施釉	—	—	—	
40	物原Ⅰ	—	陶器	漏斗？	黒褐色	鉄釉	内面のみ施釉	—	—	—	
41	—	—	白薩摩？	不明	灰白色	無釉	—	最大長 3.6	最大幅 3.5	最大厚 3.2	獅子頭

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要 **縄文の森から** 第5号

発行年月 2012年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail minami@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 (有) 国分新生社印刷

〒899-4301

鹿児島県霧島市国分重久 627-1
